

うが、このような好尚から唐時の人々は酒席を幹旋する胡姫を喜び、梨園においても胡雛・胡兒などと稱された伶人・樂工をもて囃したのであつて、唐代の詩文にはこれらのものを題材にしたものが少なくない。

音樂 次に擧げるべきは西域音樂、いわゆる胡樂の流行である。もつとも西域の音樂は必ずしも隋唐時代になつて始めて中國に傳つたものではないが、この頃になると漸く古來の中國の音樂、即ち雅樂を壓倒して宗廟の祭祀を司どる太常の音樂においてさえ胡樂が重んじられるようになって來たのである。唐代に九部とか十一部とかの音樂として正樂に立てられたものは大體胡樂であり、胡樂でないまでも外國音樂であつた。中でも最も盛んに行われたのは西域の龜茲樂であつたようである。朝廷で正樂とした程であるから、胡樂は勿論一般にも非常な流行を見たのであつて、先の元稹の詞などによつてもその状態を窺うことができる。李白の詞集に見える涼州詞などは、文句は中國のことばであるが、その題名などから考えれば、恐らく當時西域貿易の一大中心であり、西域人の來住者が多かつた涼州地方で行われていた西域系の曲調に合せて歌われたものであろう。

胡樂の流行と切り離して考えることができないのは、急旋回して舞う骨塵舞・胡旋舞、或は獸皮製の一種の被りものを着けて舞う蘇莫遮（そまくしや）など幾多の西域系舞踊の盛行であるが、その中には現在まで我が國の舞樂の中に保存されていて當時を彷彿させるものも少くない。

學術 インド傳來の音韻學は、南北朝の末ごろ中國の音韻學を完成させ、その基礎の上に唐初に至つて律詩が成立したとされているが、隋唐時代にはこれもインド起原の天文・曆法が中國に傳來して相當大きな影響を與えた。

高宗の末年から玄宗の時代へかけて七十八年の間、或はその後までも中國の天文・曆法事務に關係したのは主とし